

自衛隊音楽祭りを鑑賞して

柴田 幹雄 陸自75

久しぶりに音楽祭りを鑑賞した。プログラムは6部構成で、最初は序章「挑戦、始まる」である。

開演時間びつたり、海自の歌姫三宅由佳梨・曹の「Who will know」でステージが始まった。やがて音楽隊の演奏が加わり、音量を上げて床面への照明光と音楽でドラマチックに盛り上げる演出である。

空自の女性トランペット奏者がソロで消灯ラッパを吹奏、陸・空のトランペット奏者も加わり、次いで音楽隊が加入し消灯ラッパの旋律をモチーフにした全体演奏に移る。彼女のトランペットの音は柔らかく素晴らしい。音楽隊員はほぼ全員音楽大学卒の専門家で、陸自中央音楽隊は、世界トップレベルの軍楽隊、フランス憲兵隊のギャルド・レピュブリケース、米陸軍のパーク・シンクス・オウンに勝るとも劣らない世界超一流の「軍楽隊」である。もちろん海・空自も同様である。

航空自衛隊には、フランスのブラスコンクールで優勝したほか数多くの賞を取った世界的ユーフォニウム奏者も

いた。(残念ながら数年前に退職したらしい)

ステージは国歌斉唱。これに先立ち第302保安中隊の儀仗隊が右横手から入場して来た。制服は新しい儀仗服で紺色。アニメ「銀河鉄道」の車掌の

制服を連想させる面白いデザインだ。部隊が停止し担え銃から立て銃をし、捧げ銃をする単純な動作だが、だれもがこれに感動する。感動といえ、迎賓館に国賓が来た時に、儀仗広場に行事関係者の他に近隣の小学生が招待されて席を埋める。儀仗のため第302保安中隊が入場して停止、立て銃をするが、全隊員の小銃の床尾が地面についてスシンと音がする。その瞬間に小学生席から「わーっ」というどよめきが聞こえる。その動作が何百回、何千回と繰り返した鍛錬の賜物であることが子供にもわかるのだ。

序章の最後は陸・海・空自音楽隊合同の「君が代行進曲」。陸自中央音楽隊は濃い紫がかった紺の新制服をまとっている。陸自の紫紺、空自の藍、海自の黒と並びすごくシックな色の組み合わせである。序章の指揮は陸自中央音楽隊長樋口孝博・陸佐。長身で面長のイケメン、芸能人風のオーラがある。

第1章は「陸の挑戦」。最初は東北方面音楽隊のドリル演

奏。仙台の七夕にちなんだ「きらきら星」「七夕様」を演奏。黒パンタロンに赤にグレーをあしらったロングドレスを着た女性隊員(フラッグ隊)の旗やリボンのパフォーマンスが新鮮でよい。

次いで、西部方面音楽隊は大河ドラマ「せごどん」軍師官兵衛などのテーマを演奏。ところで使用している楽器がマーチングバンド用のものを使っている。吹奏楽ではフレンチホルンやバリトン、ユーフォニウムなどは抱えて演奏する。マーチングバンド用はトランペットなどと同じように前に構えて演奏する。重さはトランペットで1kg位だが、それでも左の腕と胸に筋肉が付く。ホルンが1・5kg、バリトンやユーフォニウムなど2kg、3kgの重量だから、これを両手で構えるとかかなり

負荷がかかる。市中パレードなど結構な距離を演奏しながら歩くとなれば相当の重労働だ。チューバなど抱えても無理だから、スーザフォンが開発されて肩にかけて演奏する。音楽隊は当然演奏しながら行進もするが、なぜかマーチングバンド用の楽器を装備しているのは自衛隊では珍しく、私は今回初めて見た。

次に登場したのは沖縄の第3海兵隊音楽隊である。今まで演奏していた西部方面音楽隊の隊員たちが突然手拍

子、足拍子でリズムを取り始めると、それに合わせて海兵隊音楽隊が「We will rock you」を演奏しながら入場し、西部方面音楽隊が退場するという面白い演出である。海兵隊の12個の音楽隊の内、米国以外に本拠を置く唯一の音楽隊とのこと。約40数名の編成で自衛隊の出演音楽隊に比べるとやや小ぶりだ。だが彼らの演奏は迫力がありバリ

ンと前に入る華やかな音色(おんしょく)で独特のもの。編成を見るとトランペットが7人、トロンボーンが4人で、サキソフォンとクラリネットが5人ずつ。意外なのはフレンチホルン3名とユーフォニウムが1名しかない。自衛隊の音楽隊に比べ中音域の楽器が少なく、むしろジャズや軽音楽を演奏するビッグバンドに近い編成なのだ。最前列には大太鼓、スネアドラム、マーチングタムが陣取り激しいリズム

を奏で、左後方の打楽器席にエレキベースギターもあって低音を響かせてくる。音楽隊とは違う音色になるのも当然である。

一般に吹奏楽で演奏する曲は、管弦楽団用の曲を吹奏楽用に編曲したものと、最初から吹奏楽用に作曲されたものと両方ある。管弦楽のバイオリンパートの譜は、吹奏楽ではクラリネットが受け持つことが多く、演奏会での吹奏楽団はクラリネットやフルートな

どがトランペットより数が多い。そして管弦楽団のようなふくよかな響きを追求するから金管楽器もまろやかな音色を求めて演奏することになる。自衛隊の音楽隊もステージ上のコンサートも多く、その方向を指向することになる。

さて、海兵隊音楽隊の演奏は「エスコピオン」に移った。前に出てきたのはアルトサククスとリードギター。二人でアドリブ合戦が始まり、トランペットはメイナード・ファーガソン風のハイノートを響かせ、ひと時アメリカンサウンドを楽しんだ。

次いで今度は米陸軍音楽隊。最初はロッキーマウンテンの挿入歌「Eye of the Tiger」。男性ボーカリストをフィーチャーしたポピュラー音楽指向の演奏だ。左後方のエリアにはエレキベースとドラムセットほかのパーカッションが陣取り軽快なリズムと重低音を響かせる。

男性ボーカリストは伸びのある見事なテナー音域で歌い上げ、これまたサククスとリードギター、そしてこのボーカルの3人をメインに、他の2曲も含め素直に楽しめる素晴らしいステージだった。

続いて陸自中央音楽隊による演奏。最初の曲は「祖国」。次いで「存じ」陸軍分列行進曲（抜刀隊）である。防大時代からこの曲に合わせて何度もパ

レード訓練をした青春の曲でもある。

第1章最後は、全陸自音楽隊、米陸軍音楽隊、海兵隊音楽隊による合同演奏だ。特に「明日へ」(復興応援メッセージソング)は全隊員が整列し、演奏ではなく合唱で聴かせた。中央大画面には東日本大震災や熊本地震の被災と復興の状況、災害派遣で頑張る隊員の様子が映し出された。

歌詞の「あなたと明日へ明日へと行く」というフレーズでは、被災した人々や、隊員たちの苦労を思って目頭が熱くなった。大画面に、歌っている東北方面音楽隊、西部方面音楽隊の隊員の顔も映し出されたが女性隊員は涙を流しながら歌っていた。

第2章は「海の挑戦」。

最初に登場するのはフランス海軍所属の、バガッド・ド・ランシビウエ軍楽隊(以下バガッド)である。バガッドは、1952年に創立され、ブルター

ニュ地方の伝統音楽を演奏する隊で、バグパイプ4名とオーボエの親戚であるボンバルドという楽器奏者5名を中心にサククスとパーカッションで合計20名ほどの小編成である。バグパイプはスコットランドだけかと思っていた

がフランスにもあることを初めて知った。ボンバルドの音色(ねいる)は素朴な麦笛のようだった。オーボエは、音を出すとき口にくわえる歌口を、葦

の茎を削ったリード2枚で楯円状に作る。先ほど麦笛と言ったが音の発生原理はまさに麦笛または子供の頃よくやった、たんぼぼの茎で口に付ける部分を少しつぶして音を出すあれである。バグパイプと共にエキゾチックな雰囲気醸し出す面白いハーモニーを聞かせる。

次も海外からのゲストバンドであるシンガポール軍楽隊。陸・海・空の音楽隊を合併させて国防軍内で最高の音楽隊として1994年に編成された。演奏は勿論素晴らしいが、女性ファゴット奏者が前に出て日本語で「古いアルバムめぐり……」と歌う「涙そうそう」は、東南アジア風の衣装の男女による舞踊のパフォーマンスも

あつて視覚的にも楽しませるものだった。



シンガポール軍楽隊と海自東京音楽隊

た。

今年の音楽祭りには米国の他、フランス、シンガポールが招待されているが、軍楽隊の交流は盛んである。軍事交流と言うとやや身構えることがあっても、武器に代えて楽器を携えての訪問だから交流の先遣隊には適している。2002年には韓国で行われた国際軍楽祭に中央音楽隊が参加し空自の輸送機で楽器なども輸送した。戦後初めて日の丸をつけた「軍用機」が韓国に着陸したということも音楽隊交流なればこそ。一昨年は韓国海軍軍楽隊が7年ぶり4回目の音楽祭りへの参加

で、海自音楽隊との合同演奏もしている。合同演習はともかくまずは音楽からというところ。

シンガポール軍楽隊の後は海自東京音楽隊で、またまた歌姫、三宅3曹の歌声で始まる「この星のどこかで」でスタートした。三宅3曹がワンフレーズ歌うと海自二人目の歌姫、中川麻梨子3曹も登場、2人のソプラノが絡みあうデュエット。歌姫2人の共演は初めてだとのこと。海自最後の演奏は約束の「軍艦行進曲」。会場から拍手

子も出た。指揮は海自東京音楽隊隊長樋口好雄2海佐。この曲は軍艦旗とともに海軍から海自が受けついで偉大な遺産の一つである。ペルシヤ湾での掃海のため、海自掃海艇が出港する見送

り。

り行事で、首相官邸から「軍艦行進曲を演奏するな」というお達しが出るほど偉大な曲なのである。

第3章は、「飛翔・昇りゆく挑戦」をテーマに、防衛大学校儀仗隊のファンシードリルと自衛太鼓である。

防大儀仗隊のドリルは、ややアップテンポで軽快なパフォーマンスを売りしている。ドラムも含めて30数名の編成。まさに一糸乱れずという動作で、4・3kgもあるM小銃を軽々と扱い、最後は全員左手で銃をくるくる回しながら、右手で敬礼をするという「離れ技」も披露した。またドラムメジャーはシンガポールからの留学生だとのこと。

次は音楽祭り最大の呼び物、自衛太鼓である。全国の基地・駐屯地の太鼓クラブチームの中から、本日は12個のチーム約150名が参加している。

2台の大太鼓が腹に響く音を打ち出すと、太鼓を担い、のほり、台車に乗せた大太鼓を含め2列の隊員がうねるように入ってくる。次の瞬間列がばらけるや、全員が所定の位置について演奏隊形ができる。演奏演技ももちろん

だが、こういった演奏前後の動作も感心する。さてその太鼓演奏は感動の一音である。よく「武道館を揺るがさんばかりの」と言うが、本当に座っている椅子の振動が尻に伝わる。膝の上の

コートもびりびり振動している。それは耳で感知する音ではなく体全体に感じる空気の波なのだ。会場にいる人だけが味わえる感動である。

第4章は「空への挑戦」。最初の曲は空自中央音楽隊と7名の人間太鼓チーム共演による「タタリ神」。1もの「け姫」の大猪俣のタタリ神の威容と突進が太鼓チームの和太鼓と、ティンパニーの力強いリズム、そしてブラスの響きで表現されアニメのシーンをほうふつとさせる演奏だった。続く曲も「天空の城ラピュタ」で、空自音楽隊長は宮崎アニメと作曲家の久石譲が好きなものかもしれない。

最後は空自のテーマ曲「空の精鋭」である。空自の演奏に無くてはならないフラッグチームも当然大活躍で大いに楽しめる演奏だった。フラッグチームはシーンごとにつまみ変える。この時暗い舞台の端にいて次に使う旗を準備して渡している隊員たちがいる。迷彩服を着た彼らは東部方面各部隊から選出された演技支援隊のメンバーで、楽器や大道具の出し入れなど、まさに縁の下での活躍である。

いよいよ最終章「終わらぬ挑戦」に移る。ステージ中央に演技支援隊が準備したレッドカーペット上を、颯爽と歩を進め指揮台に立ったのは空自音楽隊長松井徹生2空佐。曲は冬季オリ

ピックで金メダルを獲得したフィギュアスケートの羽生選手が演技のため選んだ「SEMPER（清明）」である。太鼓と横笛の音で演奏が始まると、両サイドから第302保安中隊儀仗隊が入場、カーペットをはさんで、と列の隊形をとる。その間をフランス、日本、シンガポールそして米国旗が旗衛とともに入場する。そしてフィナーレのためフラッグチームの女性も演技支援隊の迷彩服の1人も含め全出演者が入場してくる。そして曲は「ジュピター」。この曲はホルスト作曲の組曲「惑星」のうち「木星」（ジュピター）のテーマを平原綾香が歌って人気が出た曲である。全出演者の前で陸2人、海2人、空1人で5人の歌姫たちがアカペラでジュピターを歌いだす。2009年に



5人の歌姫によるジュピターの合唱

海自音楽隊が初めてボーカルとして隊員を募集した。日大芸術学部で声楽を学んだ三宅由佳梨さんがソプラノ歌手として海自に入隊した。以来海自の歌姫として脚光を浴び、大いに海上自衛隊の広報に貢献しただろう。これに続き陸・空自音楽隊も女性歌手を採用した。本日は、陸自の松永美智子3曹、鶴（つぐみ）真衣3曹、空自の森田早貴1士の5人がそろっての出演である。宝塚歌劇団にも負けない？豪華さである。歌にも聞きほれたが、陸自の歌手が着ている制服のドレスがシックでよらしい。シヨート丈のジャケットにイブニング丈のロングスカートとというのは3自共通だが陸自の紫紺は一段と映えている。

いよいよ最後、「栄冠は君に輝く」で全員退場。高校野球のテーマソング、青春の曲である。陸自の女性フラッグチームメンバーは、部隊で音楽祭りの要員として選ばれ、かなりの期間、厳しい練習を重ね、仲間と迎えた人生一度の大舞台。最終公演の退場時には大泣きしながら手を振って出ていく。甲子園と同じ青春のページが終わった。

そして指揮者と3人のトランペット奏者だけが残り、消灯ラッパの3重奏で、今年の音楽祭りは全て終了。心地よい興奮と感動を胸に会場を後にした。